

論文要旨

【背景】近年、医療の高度化・複雑化、患者の権利および自己決定権への意識の向上、価値観の多様化に伴い、医療専門職にはより一層高い倫理観が求められている。それに伴い看護基礎教育においても看護倫理教育の必要性が高まっている。中でも臨地実習は学生が実際に患者を受け持ち、看護実践を経験できる唯一の場面であり、看護倫理を学ぶ好適な機会である。学生が臨地実習において倫理的問題を多角的に捉え、問題解決に向けた行動がとれるような教育支援を検討することにより、実習における教育実践知を得られると考えられる。

【目的】本研究は、臨地実習において、学生の顕在的および潜在的な倫理的問題への気づきと研究者および教員の対応を抽出し、倫理的問題の解決に向けた力の育成への教育支援の検討および今後の課題について示唆を得ることを目的とした。

【方法】臨地実習において学生が顕在的および潜在的な倫理的問題に気付いた場面での、研究者と教員の教育実践の一連の経過をプロセスレコードとして記録したものを分析した事例研究を行った。

【結果】研究に協力の得られた学生は7名であった。10日間の間に学生が気づいた倫理的問題の場面は全部で8場面であった。場面の内容をThompson & Thompson (1992/2004)のカテゴリーで分類した結果、サブカテゴリーと事例のタイトルは以下のようになった。

「患者と専門家の自律的自己決定」は1例 患者の思い、現在の病状を伝え代弁者となること、「プライバシーを守る権利（守秘性）」は4例 患者が羞恥心を抱かないよう採尿バッグ内の排泄物が人目に触れない配慮、脱衣時に病室のカーテンを閉める配慮、電子カルテの取り扱い、廊下やエレベーターなど公共の場における会話、「自分自身や自分の身体に起こることを決定する権利（自己決定）」は1例 患者が知りたい情報を得た上で、自分らしく生活することを守ること、「人に敬意を払うこと」は1例 患者、家族に対して敬意のある対応をすること、「意思決定と行為に対し責任を負うこと」は1例 患者に必要な看護援助を行うこと

【考察】事例の記述からそれぞれの場面で行われた教育支援を検討した。倫理的問題の場面において必要とされる教育支援としては、「倫理的問題に気づくこと」すなわち学生の気づく力を支持する教育支援、気づきを促す教育支援、気づきを促すための教員や看護師の行動と実習環境が重要であると考えられた。「問題を分析し、どうすることが最善か判断すること」としては、問題を多角的に捉えられるような関わり、発言しやすいカンファレンスの雰囲気、病棟側の受け入れる環境を創り出すことが重要であろう。また、「判断に基づいて実践すること」としては、学生をエンパワーメントすること、教育機関と実習施設との間を取り持つこと、さらに「行為を省察すること」が重要であると考えられた。

本研究より、倫理的問題に取り組むための教育機関と実習施設の連携の強化、教育者と学生間に潜む倫理的問題の可能性を認識し、学生が安心して学習できる環境の整備の必要性が示唆された。